
十二の約束と十五の誓い

界軌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十一の約束と十五の誓い

【著者名】

ZZマーク

N6955U

【作者名】

界軌

【あらすじ】

貴族の令嬢である露南は幼い頃、とある将軍に求婚した。その事実は十五歳になつた彼女に羞恥心を惹いて、時折酷く苦しめる。その将軍に会わずにいれば過去の恥で済んだものを、国家行事で会わざるを得なくなり……。懲りずに墓穴を掘る少女の奮闘記。

露南が十二歳になつたら、將軍は露南と結婚するのよ！ 約束よ！

つ、ああああああああああああああ！――！――！

そう叫んだ六歳の自分を埋めてしまいたい！ 穴を掘つて念入り

形にて、アーリーで賣店で販売されるのが一般的。

……それから、あれも。

驚いた様な困った様な將軍のあの顔も、一緒に埋めてしまひた。

幼い頃の自分の台詞を思い出して、十五歳になつた露南は赤面した。自室の窓辺で顔を突つ伏して、袖と髪の間から覗く耳も真つ赤だった。

今から九年前、国王の側近であつた父に連れられて王宮に行つた時の事だ。

露南は、当時十八歳、最年少で將軍に就任した白はく?と出合つた。ちつちやな少女は、嫌な顔一つせずに遊んでくれたこの青年がすっかり好きになつてしまつた。

最高の愛情表現として、お茶会の開かれた庭園で彼に前述の台詞を言い放つたのだ。

それも、国王陛下や王太后陛下の御前で。

彼女のその宣言の後には、父のお茶を噴き出す音と、陛下のビードルの響きが辺りに響き渡った。

九年も経てば、自分の言つた言葉の意味も理解出来る。忘れない思い出に順位付けをするとしたら、露南にとつてこれは燐然と輝く第一位の思い出であった。

何故今日この日に露南がこの事を思い出したかと言えば、明日、王宮で国王陛下の誕生祭が開かれるからだ。
勿論國中で様々な行事が開かれるのだが、王宮には主立つた家臣やその家族が招かれている。

当然、露南も行かなくてはいけない。

衣装も装飾品も、乳母が完璧に準備を終えていた。
露南がやることと言つたら、早く寝ること位になってしまったのだ。

そういう余暇といつものばかり考え方で、余計な事を考える隙が生まれてしまう。

まず彼女が考えたのは、久方ぶりに会う友人の事だった。
それから、彼女の父親も来ているだろうから、
明日はご挨拶できるかしら。

と、思う。
それから、彼女の父親は軍の高官なので、
軍の関係者はどのくらい招かれているのかしら?
ときて、
当然將軍位の方は全員いらっしゃるわよね。
と続く。

露南にとつて『將軍』とつく役職者で思い浮かぶのは、白?だけ

だつた。

怒濤の様に脳裏に蘇る恥ずかしき思い出に、露南が悶え苦しむのは自然な流れであった。

ところで、露南は十一歳の時から將軍には会っていない。

何故かと言ひうと、良家の子女の例に漏れず、彼女も成長するに従つて家から出でずに過ぐすようになったからだ。

父が九年前に彼女を王宮に連れて行つたのも、やがて来る娘の定めを知つてゐるからこそ思い出を作つてやうと氣遣つたからかもしれなかつた。

余計な思い出ができたものだ……。

ともかくその思い出の日から六年、露南が十一歳になつた時、將軍は特にこれと言つて何も言つてこなかつた。

当時の彼女はそれを酷く不満に思つた。

將軍は約束を忘れてしまつたのだと不貞腐れ、絶対会つたりしないと家に閉じこもつた。

時期が時期だつただけに、彼女はそのまま乳母の『露南様深窓の令嬢化計画』の餌食となつてしまつたのだ。

露南の母の乳姉妹であった乳母は、お転婆で父親似の容姿を持つ少女にいつもこう言つていた。

「露南様。十一歳になられたら、きっとお母様に似てお美しい淑女になれますよ！」

周囲の者にはこうも聞こえた。「必ずや淑女にしてみせますとも！」といつ決意表明に。

乳母の思惑は脇に置くとして、露南はこのいい聞かせによつて、大人とは十一歳からなのだと想つこんだ。それが將軍に「十一歳に

なつたら」と言つことになつた大きな要因だ。

そうして成長した露南は段々と自分の台詞に恥じらいを覚え、将军が何も言つてこないことが寧ろ幸いだと思い始めた。

幼子の戯れ言をいつまでも覚えている事は無いだろう。

それでも時折発作のように羞恥心の波に襲われる。

そんな波に襲われ続けながら、空は闇に覆われ、やがて陽光が燐々と輝く朝が来てしまった。

「さあ、髪には藤の生花を飾りましょうね~」

上機嫌の乳母に、理想の淑女に仕立て上げられながら、露南は「行きたくなーい」の大合唱を内心で行っていた。

行きたくなーい

行きたくなーい

行きたくなーい

しかし遅刻は許されない。

溜め息を堪える事數十回。

乗り込んだ馬車は王宮の門をくぐり、賑やかな祭典の場へと露南を押し込んだ。

「露南！」

馬車から降り、先に王宮に行つてゐる父を捜しながら進んでいる

と、名前を呼ばれた。

振り向けば、友人の朱珠がいた。

黄色い藻裾の上に赤い外衣を来た同い年の少女は、露南の前で立ち止まる。

「久しぶりね、朱珠」

声を掛けると、彼女はにやりと笑った。

「ホント、久しぶり。ずっと聞きたかったのよ。將軍閣下とはどうなったの？」

好奇心にまみれた瞳が露南のそれを覗き込んでくる。

みるとうちに露南の顔は不機嫌そのものになつていった。

この友人は例の思い出を聞き出した時、国王陛下並みの大笑いを見せたのだ。完全に娛樂か何かと勘違いしている。

「あら。その顔だと進展無し、かしら？」

「進展なんてする訳無いでしょう？ もう四年も会つてないんだから。向こうだつて綺麗に忘れているわよ！」

藤色の領布を揺らして露南が腕組みをすれば、友人は唇を尖らせた。

「つまんない！」

「つまんなくて結構よー！」

お互にしかめつ面を合わせていたが、どちらとも無く気がついた。

祝いの祭典でこんな顔をしていては陛下に失礼だと。

「止めましょ。今日は喧嘩は無しね」

「仕方が無いから、同意してあげるわ」

穏便に事を済ませうとする露南に対し、いつも一言余計なのが朱珠であった。

再びにやりと笑うと、友人はふと視線を露南から外した。ある一点に釘付けになつたその瞳に好奇心の輝きが灯つたような気がして、露南は一步後ずさる。

ところが、朱珠は警戒心丸出しの友人の腕をがつちり掴んで耳元で囁いた。

「ふふふふふ……。結果はきちんと報告して頂戴ね」

何の事やらと露南が首を傾げると、朱珠はすんなり手を離す。

「じゃあ、私は遠慮してあ、げ、る」

そう言って立ち去つて行つた。

訳が分からない露南は一人首を傾げる。

その背後から声が掛けられた。

「……露南姫」

かちーん、と彼女は固まつた。

どうにも聞き覚えのある声だった。

動かない露南に、声の主は正面まで回り込んで来てくれた。

恐る恐る顔を上げると、そこに立っていたのは一十七歳となつた白？将軍、その人であった。

「……将軍」

眩いた露南に、将軍は小さく会釈した。

「お久しぶりですね。お元気でしたか？」

不貞腐れたり、顔に色々塗つたくられたり（化粧の訓練）、衣装を沢山着せ変えられたり（成長期と乳母の趣味）していたが、まあ、元気は元気だろ？。

「へん、と頷く。

頷いてしまつてから、これは淑女にあるまじき行為だと気がついた。

まるで、子供もの様では無いか。それこそ、彼に求婚した時のように……。

ああああああああああーーーーー！

叫んで走り出したい衝動を露南は必死で押さえ込んだ。

「お、お久しぶりです、将軍。えと、私はずっと元気でした。将軍もお元気そうで……」

何とか言葉を捻り出すも、たどたどしさは隠せない。

もちろん彼の顔を見上げる勇気なんて出でこないから、俯いたままだ。

「、この後、どうじゅうてのよ……。

すり落ちた領布を直して間をもたせようと試みるが、そんなものはすぐに終わってしまった。

「姫…………」

将軍が何事か彼女に話しかけようとしたその瞬間、再び少女の名が呼ばれた。

「露南！」

一人揃つて声の方に顔を向ければ、そこにいたのは官服を身にまとつた露南の父、瑛楨ようしんだった。

「父様！」

父の姿に安堵を覚えた露南は、彼がこじらこじらて着ぐのを待てず、自分から歩み寄つて行つた。

「無事に来たのだな。中々会いにこないから、どうしたかと思つたぞ」

瑛楨は相好を崩して娘に向かい合つた。

それから、一体誰と一緒にいたのかと彼女の背後を見やつて、「おや」と眉を上げた。

「白将軍。早々と娘に会つていたのですな

「いえ、今そこでたまたま会えただけですよ」

軍人にしては珍しく穏やかな顔立ちをした彼は、今も静かな微笑

みを浮かべていた。

淑女らしく長い袖で口元を隠しながら、露南は横田での笑みを見た。

花を探りたいと我が仮を言つたひたちやな露南を抱き上げた時の笑みとは違う種類である事が、少し残念に感じた。

それから父と将軍は宫廷では付き物の世間話を始めてしまった。

勿論家にこもりつきりの露南に分かる話では無い。

それになにより、彼女は彼らの口からつづかり九年前の話が出やしないかとひやひやしていた。

逃げ口を探して視線はうるわしきと周囲を探る。

「あ

見知った顔を見つけた露南は声を上げてしまった。

父親と将軍が話を中断してこちらを向く。

父のものはともかく、将軍の視線にどきりと心臓が脈打つた。

「あ、あの……。申し訳ありません、将軍、父様。友人を見つけたので失礼させて頂きます」

将軍の瞳が余計に露南の心を追い立てて、彼女は逃げの一 手を打つた。

しとやかに一礼して、そそくさとその場を立ち去つた。

その背中を見ながら、露南の父はぽりぽりと頬を搔いた。

「私が言つ事では無い氣もするが、……逃げられたんじやないかい？」

上脣のある白いをちらりと見上げると、彼は露南の背中を見つめ

？」

ながら露の端を引き上げた。

「『』[冗談を]

その後に続く言葉なんだらうと瑛楨は考えてみた。

『』[冗談を言わないで下さい。

とかだと、多分困ったような笑いになるだろ？　『』の表情とは今致しない。

では、「『』」を抜いてみたらどうだらう？

[冗談では無い。]

わーお。『』の笑顔にぴったり。
見当がついてしまった事を後悔し始めた彼に、白将軍は笑みを引
っ込めて会釈した。

「私も失礼させて頂きます」

露南の向かつた方向へと足を向ける彼に、瑛楨は言った。

「あ……。娘はまだ十五歳だと云ひ事を忘れずに頼むよ、将軍」

振り返った白？は薄く微笑む。

「いいえ。よつやく十五ですよ

それだけ言つて立ち去つて行つた。

「そり、だよね……」

気の削がれた様に、諦めた様に、瑛楨は言った。

友人の陰を探して人混みを歩いていた露南だが、中々見つからない。

ここから抜けてもっと別の場所に行つたのかも知れないと思い至り、踵を返す。

そこで、とんと肩をぶつけてしまった。

「大丈夫ですか？」

そう声を掛けて来たのは、白？将軍であった。

「しょ、將軍……」

何故ここに！

内心叫ぶも、露南は懸命にそれを口にすまいと飲み込んだ。

「ご友人はどうされました？」

至極普通の事を聞かれて、彼女はそのまま答えてしまった。

「あ、いえ、見つからなくつて。もっと別の場所に行つてしまつたかもしけないので、他の会場を探そうと思つたんです」

露南の言葉に真剣に頷いた将軍は、「ああ」と何かに気がついた

様子を見せた。

視線を横の方に移すと、小さく指差した。

「もしかしたら庭園の方に行かれたのかも知れませんよ」

その指先につられて顔を動かした露南は、整然と木々の生い茂る庭園を見て、まさしくそつかもしれないと思つた。

「ああー、きっとそうですね」

両手を打ち合わせて、露南は微笑んだ。

何故だか絶対庭園にいるのだと思つてしまつたのだ。

「探してみます。有り難うございました、將軍」

いそいそとそちらに向かおうとした露南の田の前に、大きな手が立ち塞がつた。

きょとんと瞬いてからその手を逃ると、將軍から伸びている。

「私も一緒に探しましょ。一人より一人の方が早く見つかりますよ」

「ですが、將軍もお忙しいのでは?」

「いいえ。今日は警備の任からも離れているので、時間は有り余っていますよ」

静かな笑みと広い庭園を順に見て、露南は決断した。

「では、宜しくお願ひします……」

生け垣に沿つて歩んで行くと、やがて人々の作り出す喧嘩は遠のいていった。

東屋や池の畔で目を凝らすが、やはり友人はいない。
それどころか、人づ子一人いやしない。

「…………」

祭典の真つ最中だ。流石にこんなところまで来ないだろうと思いつつた時には、露南は自分が今何処にいるのかわからなくなっていた。

将軍が一緒でなければ確実に迷子だ。

「将軍…………」ここまで來ていないと、きっとここでは無かつたんですね

「そうかもしませんね」

傍らの彼を見上げて露南が言えば、将軍も同意を示してくれた。
「では、そろそろ会場に戻りましょう

少し道を外れた生け垣の奥を覗きに来ていたから、小道に戻るうと足を動かす。

ところが、露南の目の前に大きな壁が立ち塞がつた。

急に壁が出てくる訳が無いから、これは将軍の体だつと予想がつく。

ち、近い……。

本当に田の前、顔の前に彼の胸があるので。」そのまま顔を上げてしまつ事が躊躇われる。

沈黙する露南の頭上から穏やかな声が聞こえた。

「「」は、貴女が隠れていた所に似ていますね」

びっくりして、距離など忘れて露南は顔を振り上げた。
その事に気がついた将軍は、辺りを見ていた顔をゆっくりと露南の方に向けた。

「それ、は……、その……」

「九年前の事ですよ」

そう。露南が十一歳になるまで会っていたとは言え、彼は將軍職だ。会えた時も挨拶程度しか出来ず、かくれんぼをして遊んだのは六歳のあの時だけなのだ。

「覚えていらっしゃるんですか?」

沢山遊んでもらつたから、かくれんぼの事まで覚えているとは思わなかつた。

露南の驚きに満ちた声に、彼は微笑んで答えた。

「もちろん。忘れたりはしませんよ」

それじゃあ、やつぱり……。あの、求婚の事も覚えてる…?
駆け上がつてくる羞恥心に、思わず問い合わせたくなるが堪える。
巨大な墓穴を掘るだけだ。

「そ、そなんですね……」

「私には姉も妹もいなかつたので、貴女と遊んだ事はとても新鮮でしたよ」

すきりと胸が痛む。

そうか、將軍は妹の様に思っていたんだ……。

良かつたぢやない。それなら余計にあの求婚の事なんか本氣にしてないわよ。もう忘れちゃってるわよ。

そう、内側で自分が言つ。

でも一方で悲しみがじわじわと胸に広がっていく。
瞳に涙が浮かびそうになつて、さりげなく顔を逸らした。
ところが、次の將軍の言葉で、すっかり涙は吹き飛んだ。

「お茶会の席で求婚された時も、本当に驚きました。なにせ、初めて……」

言いかけの言葉を断ち切つて、露南は叫んだ。

「覚えていたの!-?」

涙と一緒に敬語も吹き飛んだようだ。

將軍の胸ぐらを掴む様に身を乗り出していた。

呆気にとられたような顔をした將軍だつたが、すぐに元の笑顔に戻つた。いや、少し困った色が混じつている。

「当然です。なにせ、初めて女性から求婚されたのですよ」

この国では男性からの求婚が一般的だ。

だから露南の様な行動は常識外れと言える。子どもだから笑つて

許された所行と言えよ。

「それなら、……」

言いかけて、唇を震わせた露南はひゅっと息を吸い込んだ。

「それなりにじつじつ十一歳になつた時、何も言つてくれなかつたの
！　！」

叫んでから気がついた。

露南はもうずっとずっと将軍が好きだつたのだと。
子どものした事なんだから本気にされなくて当然なのだ、そう思
い込む事でこの想いを誤魔化して来たのだと。

飛んでいったはずの涙が戻つてくる前に、露南は逃げ出さつとし
た。彼の胸を掴んでいた両手を外して後ずさりする。
けれどそれ以上下がる事を思いとどまらせたのは、将軍の一言だ
った。

「待つて下さい、姫」

露南の体を捕まえた訳では無い。
けれどその真摯な声音は彼女の動きを止める力を持つていた。
その場で俯いて、顔を上げようともしない露南に、彼は静かに話
しかけた。

「どうか、言い訳をさせて下さい」

「……言い訳？」

ちらりと彼を見上げる露南に、真剣な眼差しを送りながら将軍は

頷いた。

「ええ。 そうです」

露南は不承不承頷いた。

体の脇に垂らした右手の袖の下で、その手の甲に左手を添える。動搖を静めようとこつ時の彼女の癖だ。

「ありがとうございます」

ほつとした様に言ひ将軍に、上げそつてなる顔を必死で押さえながら露南はもう一度頷いた。

「まず、十一歳は若すぎました」

その言葉に、露南はぎゅっと肩を竦めた。

この国の初婚の平均年齢は十五歳。だから、若すぎると言ひ彼の言は正しい。

でも露南には年齢差を指摘された様に聞こえた。子どもは相手に出来ないと言つていいみたいだ。

「私はこれでも国王陛下の遠戚である白家の当主です。貴女の心が変わった場合、私との結婚が決まつていては取り消す事など不可能でしょう?」

「…………？」

握りしめた右手はそのまま、露南は首を傾げた。
おかしい。これでは、彼は露南の将来を思つてわざと何も言つてこなかつたみたいでは無いか。

「ですから、貴女のお父君と相談をして、十五歳になるまでは婚約はしない事にしたのです。我慢をするのはかなり大変でした」

「……こんやく……？　がまん……？」

なにか、おかしい。聞き慣れない言葉が出てきた。

露南は分からなずきて片言で彼の言葉を繰り返した。

「ええ。結婚する前に婚約しなくてはいけないですからね。いえ、いきなり結婚は嫌だと言われてしまって」

「……父様に？」

そろそろと上田遣いで彼を見上げると、白将軍は田尻を下げた。

「そうですよ」

その微笑みに勇気づけられて、露南は肝心な事を聞く事にした。

「あの、将軍は、私と結婚する気があるのですか……？」

目を見開いたその顔が、何を答えるといつか。怖くなつた露南はすぐに顔を下に向けてしまつた。

彼女の首筋に、重苦しい溜め息が掛かつた。

ひえつと肩を跳ね上げる彼女に向かつて、白将軍は何だか情けない声で言つた。

「今の話の流れでそう思つて頂けなかつたら、私は自信を喪失してしまいますね……」

その後は沈黙が続いた。

よもや、どつぶり落ち込ませてしまったのかと露南は慌てた。顔を上げて、斜め下を見下ろす将軍に必死で言った。

「あ、あの、別に将軍の言う事を信じてないとかでは無くてですね。その、これまで放つておかれたから信じられなくって、……あれ？信じてない事になっちゃう。そ、そうじゃなくってですね、えっとですね」

言い募れば募る程、掘つてはいけない穴を掘り進んでいた。将軍の顔はどんどん暗一くなつていく。

「ああ、いえ、あのっ！ ちゃんと信じます！ 今からじっかり信じます！」

良く晴れた空の下で暗雲さえ背負い込みそうな彼に、露南は決断した。

かなり勢い任せだつたし、その後どうなるかなんて欠片も考えていなかつたが、それでも露南は将軍に向かつて宣言した。

胸の前でしつかりと拳を握つて身を乗り出す彼女を、将軍はじ一
つと見つめてきた。

その目は言つている。「本当に信じてくれますか？」と。
だから露南も視線を外さずに、こくんと頷いた。
自然と拳はほどけ、祈る様にお腹の前辺りで組んでいた。

しばし二人は見つめ合つていたが、白将軍は落ちていた肩をきら
んと元の位置に戻して、再び微笑みを浮かべた。

その時、ほつとした露南の手に、こつんと何かがあたつた。

見下ろしたその瞳に映つたのは将軍の手だった。露南の手より大きく、軍人らしい無骨な指だった。

大きくて、長い……。

そんな感想を抱いていると、その手が動き出した。

ん？

露南が首を傾げている間に、何故か彼女の組んでいた手が解かれて、指が組まれていた。

それも手の甲と甲を合わせた状態で。

これは一体全体どういう事か。

首を勢い良く振り上げたところで、将軍の満面の笑みとかち合つた。

「私が、貴女との結婚を望んでいると、信じて頂けるんですよね？」

ひくり、と露南の頬が引きつった。

まさしく自分はさつきやつ言つたのだ。

「は、はい……」

自分の言動を思いで出して赤面する露南に、けれど将軍は憂い顔を見せた。

「嬉しいです。……ああ、でも

「で、でも？」

「やはり、少し自信が無いです

「……自信ですか？」

おひおひと露南は視線を彷徨わせる。

自信、自信。さつきも言っていたが、やはりそれは露南が彼の言う事を信じている云々の事だらうか。

それにしても、組まれた指のせいで離れる事も出来ない。

「勿論、貴女に信じて頂けているかどうかと言ひ事ですよ」

心の中を読んだ様に彼は言つ。

露南は思わず叫んだ。

「信じました！」

「……本当に？」

「本当にです！」

「じゃあ、証明して下さー

にっこりとした笑みで言われて、露南は「は？」と間抜けな顔を晒してしまった。

「貴女が、私の事を信じていると言ひ事を証明して欲しいんです。
……ダメですか？」

最後は眉尻を少し下げた表情で付け加えられた。

証明、証明……。どうやつて？

困惑する露南を他所に、將軍は穏やかな表情でいた。

朱珠あたりなら「おいおい」と突っ込む様な展開だが、経験不足な露南は流されるので精一杯だ。

だから、流されるままに証明方法を考える。
助け舟とおぼしきものが將軍から発せられる。

「貴女が、『家族に親愛の情を伝える時と同じ方法で結構ですよ』

父親とはどうしているだろ？と考える。

小さい頃はぎゅっと抱きついたりしたが、そんな事だらうか。
いやいや、手が組まれている以上それは無理だつた。
それ以前に恥ずかしくつて無理！

再び頬を染めて俯いた露南の脳裏に、ぱっと閃くものがあった。
友人が言つていたのだ。「男なんてこれで満足しちゃうわよ！」
つて。その時に朱珠が呆れ顔をしていたことを思い出せれば良かつ
たのだが、露南はこれに飛びついた。

これしか無い、と思つた。

「あ、あの、目を瞑つて、屈んで下さい！」

將軍はとても素直に露南の指示に従つ。

瞳を開じて、ゆっくり彼女の方へと屈んで来た。のだが、

「ち、違います！ ちょっとです！ ちょっとでいいです……」

どんどん近づいてくるその顔に恐れを成して露南は悲鳴じみた声
を上げた。

そこでようやく將軍は動きを止めてくれた。

露南は深呼吸をして、覚悟を決める。

少しだけ背伸びをして、彼の顔の方へと首を伸ばした。
もう少しで触れる、とこうこうで、ぱちりと將軍の瞳が開いた。
近づく動きを止められない露南を良い事に、彼は自分の顔の位置

をほんの少し修正した。

「ふつ……、ん」

脣が重なつて、露南の体に震えが走った。

そつと離されても、彼女は呆然と目を見開いていた。

流石にまづかったかと、将軍は露南に向かつて軽く頭を下げた。

「申し訳ありません。その、少し悪ふざけが……」

言い訳は途切れた。

露南が背伸びをして彼の頬に口づけたからだ。

「……本当は、いつひとつと思つたんです」

頬を膨らませて言つと、将軍は神妙な顔で再度謝罪をくれた。
その真実申し訳無いと思つてゐる表情に、露南は少し仕返しが出来た気がして微笑んだ。

それに微笑みを返した白将軍は、組んでいた指を解いた。
自分の大きな手で露南の両手を包み込んで、その場に膝をつく。

「瑛家ご息女、露南姫。どうか私と結婚して頂けないでしょうか。
この生涯を掛けて貴女を守り、愛し続ける事を誓います」

嬉しくて、嬉しくて。露南の胸はぎゅうぎゅうに締め付けられる
よつて、甘く痛んだ。

じくんど、やはり子どもの様に頷いてしまつて。でも、将軍のその真摯な表情は崩れなかつた。露南にやり直しを許してくれている。頑張つて背筋を伸ばして、ぎこちなくも可憐な微笑みをその顔に浮かべた。

「はい。喜んでお受け致します」

白？の表情は緩やかに柔らかなものに変わっていく。
懐かしい、いっぱい遊んでくれたあの青年の面影に胸中を押され
て、露南は言った。

「大好き」

淑女のする物言いで無かつたが、それでも露南の本当の心だ。
一瞬驚いた顔をした将軍も、酷く嬉しそうに微笑んで、立ち上がり
るや否や、そのまま露南を抱き締めた。

「露南と、やう呼んでも構いませんか？」

将軍の胸に頬を押し付けられた露南は、「姫」と他人行儀に呼ば
れるのが好きでは無かつたから、一も二もなく頷いた。

すると将軍は露南の肩をそつと離して、上から覗きこんで来た。

「では、私の事も名前で呼んで下さい」

「……？様」

僅かに首を振つて、将軍は言い直す。

「？、と」

男の人のお名を呼び捨てた事等無い露南は、本当にやう呼んで良い
のかと戸惑つた。

けれど将軍は前言を翻さない。

「…………？」

小ちな声でそう呼べば、嬉しそうに笑うから、露南はほつとした。

「では、そりそろ陛下にござり挨拶にいかないといけませんね」

その口調に露南は飛び上がりそつと驚いた。

「まだ行つてらっしゃいらなかつたの？…」

将軍の様に重職についているものは、登城したらまず真つ先に国王陛下に挨拶をしなくてはいけないと言つて、まだ行つていなかつたとこの人は言つたのだ。

焦る露南に、将軍は悠々と言つた。

「一緒に行こうと思つたんです」

その一言で、露南はみるみるうちに真つ赤になつた。
しばらぐ肩を震わせていたが、やがて囁くよつと言つた。

「あ、赤いのが治まるまで、もつ少し、待つて下さこ……」

「ええ、勿論

彼は露南の耳元でそつと囁く。

「我至福待？」

……貴女を待つ事こそ私の幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6955u/>

十二の約束と十五の誓い

2011年7月10日19時19分発行